

緻密に描いた設計図を元に、実際に織り始める瞬間が一番楽しいと話す佐古さん



「糸になる前の素材から自分の手で作ってみたい」織物作家の佐古さんは、手のひらに乗せた小さな綿をいとおしそうに見つめます。

佐古さんが手仕事に興味を持った理由は自然なものでした。幼い頃から母親が洋裁の仕事をしている姿を見て手伝ううちに、いつかは自分も手仕事のお店をやってみたくて漠然とした夢を

抱き、大学卒業後は市内の服飾会社に就職します。またプライベートでも織物教室に通い、織物の奥深さや楽しさに魅せられていきます。

佐古さんにターニングポイントが訪れたのは44歳の時。乳がんを患い、入院生活を送ることになります。ベッドで考え事をする時間が増え、佐古さんの頭に浮かんだのは「人生は一度きりやりたいたいことがあるのなら体力も気力もあるうちにチャレンジするべきじゃないか？」という思いでした。

会社を退職し、織物作家の道を歩み始めた佐古さんは国内外を旅し、織物についての知識を深めます。

「グアテマラで現地の人から棒と糸で織る織り方を習った時には、織物の可能性の広がりを感じ、改めて

織物って面白いなと感じました」

活動の幅を広げるきっかけになった仲間との出会いもありました。「織物で使う綿を畑で一から作ってみたいかと誘われたんです。元々羊毛が好きで毛刈りの段階から糸を作るプロジェクトにも参加していて、綿も自分で育てて糸を作ってみたくて思いました。」

やりたいたいことがあれば挑戦してみることがモットーの佐古さん。仲間とともに綿の栽培を始めて今年で4年目になります。「無農薬なので虫の被害があったり、天候に左右されたりで日々手探りですが、収穫の喜びはひとしおです」と充実した様子で話します。

ワークシヨップなども精力的に行っている佐古さんは「たくさんの方に織物の魅力や素材からものづくりをする楽しさを知ってもらう機会を作り、一緒に活動する仲間を増やしていきたい」と思いを紡ぎます。



佐古さんに大きな衝撃を与えたグアテマラの伝統的な織物技法



佐古さんの小物作品と、種から育て収穫した二種類の綿（写真奥）



喜びの糸を手繰り寄せる

Vol.157

佐古 かおりさん
(錦見在住)

織物作家。無農薬で栽培した綿から糸を紡ぎ、綿製品を作る「いわくに綿」の活動に仲間と取り組む。国内外を旅し、国や地域によって異なる織物の文化を学び、作品のヒントを得る。

